令和5年度(2023年度) 学校評価総括表　　【伊丹市立天神川小学校】

教育目標	命輝き　笑顔あふれる　天神川小学校　ー心豊かで 意欲的に学び合う子どもの育成 ー
重点目標	（1）安心・安全に学習ができる環境づくり　（2）学力の向上と指導力の向上　（3）社会規範意識の向上を図る生徒指導の徹底　（4）一人ひとりの居場所がある学級集団づくり （5）健やかな心と健やかな体づくり　（6）家庭・地域・関係機関との連携

主要施策	施策目標 基本施策		重点項目	具体的施策	達成目標	自己評価	成果と課題	改善策	学校関係者の評価
学校教育	知・徳・体の調和のとれた児童・生徒の育成	「確かな学力」の育成 ①授業改善 ②誰一人取り残さない取組	◯基礎的、基本的な知識・技能を習得する ◯学習指導の工夫・改善 思考力・判断力・表現力の向上	・朝学習を活用し，漢字・計算の繰り返し学習や視写などを行い，基礎・基本の定着を図る。 ・教材と関連した作品や様々な分野の本を紹介し，読書への意欲を高め，読書活動の充実を図る。 ・どの教科においても書く活動を取り入れることで，学力の定着をはかる。 ・自主学習の充実を図る。 ・姿勢体操、体幹体操を取り入れ、姿勢保持や集中力の持続を促していく。 ・学習にみんなが主体的に参加できるための場づくりについて模索する。(授業にペア学習やグループ学習をとり入れる。) ・ICTを活用し、視覚的にわかりやすい授業の改善に努める。 ・単元の連続性、一貫性を持たせた授業作りにつとめる。「ふり返り」から始まる授業作りを意識し、単元全体の授業プランを考える。 ・「めあて」と「ふりかえり」を取り入れ、見通しを持って学習に取り組み、学びの成果を可視化する。 ・主体的に取り組むために評価を活用していく。 ・学級力アンケート、学級マネジメント力チェックシートを活用していく。(安心・安全な学級づくり)	・書くこと、姿勢よくする体操を取り入れた繰り返し学習を行い、基礎基本の定着を図る。 ・教材と関連した本を読んで様々な分野の本に興味をもつ。 ・ICTの活用を含め、どの子もわかりやすい授業づくりを行う。 ・児童が主体的に取り組んでいけるように評価の仕方を全教員で検討する。外部講師を招いて指導助言を得る。 ・学級力アンケート、学級マネジメント力チェックシートを活用し、指導スキルを向上させている。	B	・相互評価などを考える中で、ペアやグループ学習を取り入れることができた。また、学習内容にyおって、グループやペアの作り方を考えることができた。タブレットを活用することで、どの子もわかりやすい授業をつくることが出来る半面、タブレットを活用しないことが大切な場面もある。 ・夏休み等を活用して、カリキュラムマネジメントをおこなった。また、各学年の研究授業を通して、単元計画をたてることができた。 ・学級力アンケートについては、実施できた学級については、活用することで学級経営につなげることができたと実感できた。また学級マネジメントカシートについては、発問数の多さや入力の不便さから、継続して実施することが難しかった。 ・児童が主体的になる授業作りや基礎の定着を図る朝学習の活用を行うとともに、45分間の授業に集中して取り組むためのスキル(姿勢を保持する力やバランス力、鉛筆の持ち方など)を高められた。今後も継続していく。	・研究で、来年度も子ども達の意欲を高めるために、評価活動の充実をはかっていけるようにしていく。また、お互いの評価活動が円滑にすすめられるよう、学級作りにも力を入れていく。 ・来年度、教科書が変わることもふまえ、継続的にカリキュラムマネジメントをおこなっていけるようにしていく。 ・学級力アンケートは来年度も実施していく。また、学級作りに活用できる活動を共有していく。学級マネジメントカシートについては、職員会などで時間を設けて一斉に実施していけるようにする。 ・児童が主体的に授業に取り組めるように、姿勢体操を今後も継続し、姿勢保持する力や集中力を伸ばす。また、朝学習の活用等、繰り返し学習を通して、今後も基礎基本の定着を図っていく。	姿勢体操はとても良いと思うので、続けていただきたい。 AIドリルなどの活用も。児童はすぐに適応でき活用しているようなので引き続き取り組ませてほしい。
		新しい時代に対応した教育の推進 ①情報活用能力の育成③デジタル化の促進 ②英語教育の充実	①情報モラルの育成 ・メディアリテラシーの向上 ・タブレット活用能力の向上 ②言語や文化について体験的に理解を深める ・積極的なコミュニケーションを図ろうとする態度の育成・外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う	①職員の活用スキル向上の研修を行う。 ・高学年に向けた情報モラル研修を行う。 ・タブレットを日々の学習で活用させる。 ②ネイティブスピーカーの教師を配置している ・会話の機会を多く設ける ・ゲームを通じて発話の機会を増やしたり、授業始まりのあいさつなど基本的な表現の定着を図ったりする。	①年5回のスキルアップ研修を行う。 ・連絡帳の配信をスクールタクトで行う。 ・ドリルパークを学習に取り入れる。 ・授業の中でスクールタクトを活用する。 ②外国語の表現活動を通してコミュニケーション能力を養う。	B	・少人数型のスキルアップ研修を行うことで、職員のICTスキルアップの底上げができた。一方で、学級閉鎖時の対応が円滑に進まなかった。 ・おおむね定着している。 ・おおむね定着している。クラスでの復習や家庭学習で活用されている。 ・各学年の実態に合わせて、スクールタクトを活用できている。中高学年、タイピングができない児童が多いため、文章表現に制約が生じている。 ・ネイティブスピーカーの教師と児童が積極的にコミュニケーションを取っている。 ・課題として、英語の得意、不得意の児童の差が大きい。	・学級閉鎖時の完全オンライン学習の研修は、毎年行う。また、いつ見ても思い出せるように分かりやすいマニュアルを作成していく。 ・配置場所を分かりやすくする。 ・学年による使用頻度のムラをなくしていく。 ・特に高学年においては、手書きと同じ速度で入力できるように、朝学習等の時間を活用してタイピングの練習に取り組む。 ・タブレットを利用して予習・復習できるようにした。得意な児童には基本的な表現に既習の表現を加えて言語活動の幅を持たせた。	ネイティブスピーカーが指導しているところもとても効果があると思う。
		「豊かな心」の育成 ①道徳教育の推進 ②いじめ等の未然防止、早期発見、早期対応に向けての組織的な取組の推進 ③不登校の児童生徒やその保護者への支援体制の充実 ④体験活動等の実施	①親切・思いやりの心を持つ子どもの育成 ～あいさつする礼儀正しい子どもの育成～ ②③児童理解のための研修会の実施 〇いじめの未然防止・早期発見 〇安心できる居場所づくり④自分の身体を通して実地に経験することで、自ら考え学ぶ態度を養い、生きる力の基盤を培う。 ④自分の身体を通して実地に経験することで、自ら考え学ぶ態度を養い、生きる力の基盤を培う。	①・特別活動における集団活動や体験活動の中であいさつを実践していく。 ・児童の発達段階や実態に合わせた内容項目での教材を選び、A　自分との関わりの中で礼儀やマナーに関することやがまんすることをねらいとする授業を土台として、他人への親切・思いやりの向上を図る。 ・毎時間の学習の振り返りを記録している「道徳ノート」や授業の中での発言・態度から児童の成長を認め、励ます評価文を目指す。 ・道徳授業を深める手立てとして、ローテーション授業ができるようにする。(児童理解・教材研究の深まり・時間短縮) ②③部会や職員会、研修会などで、児童の様子について振り返る機会を持ち、全教職員の意識を高める。 ・学級担任だけでなく、学年・学校全体で児童に関わっていく。 ・いじめアンケートを実施し、アンケート内容をもとに個別の聞き取りを行い、適切に対応する。 ・不登校傾向にある児童やその保護者と密に連絡を取り合い、登校への手立てを一緒に考え、適宜関係機関につないでいく。 ・不登校傾向にある児童のために、別室を開設する。・学年・子どもの発達に応じて、校外での学習や外部から講師を呼んでの出前授業を行う。 ④環境体験学習や自然学校などの野外での体験学習を行う。	①代表委員会のあいさつ運動や生活目標を生かして、あいさつのできる良い学級環境に整える。 ・児童アンケートの項目で「先生や友だちにあいさつしている」と回答する割合が80%以上になる。また、「自分を大切にすることや、他人への思いやりについて教えてくれている」と回答する割合が80%以上になる。 ・道徳ノートでの振り返りの感想には、今日の授業のねらいである道徳的価値を捉えた自分との関わりの記録文が書けるようになる。(「今の自分は～」「自分だったら～」と自分におきかえて捉えられているか) ・昨年度は、全校の中で、1学年(4年生)の実践であった。今年度は、複数の学年の実践を図る。 ②③毎月1回、生活指導部会を開き、情報交換を行う。また、職員会議で各学年から児童の様子を話してもらい、職員全体で共通理解を図る。 ・いじめアンケートを学期に1回実施する。 ・いじめ問題対策委員会を必要に応じて開き、すべてのいじめ案件について対策を考える。 ・保護者にこまめに連絡を取り合い、一緒に解決していこうという関係を作り、必要に応じて関係機関へつなぐ。 ・別室を開設し、毎時間職員を配置することで、だれもが安心できる居場所をつくる。 ・別室利用をする際は、事前に本人、保護者、学級担任、生活指導担当で面談を行い、利用目的やルールを確認してから正しく利用できるようにする。 ④各学年、年に1～2回の校外学習や出前授業を計画的に行う。	B	・代表委員のあいさつ運動や生活目標を活かして、あいさつのできる良い学級環境を整えることができた。学校評価アンケート(教師用)に、「先生や友だちに進んであいさつすることのよさの指導をしている。」の項目がなかった。 ・児童アンケート「自分は先生や友だちに進んであいさつをしている。」と回答する割合が74．1%で昨年度より低くなっている。(昨年度　89．1%)また、「自分を大切にすることや、他の人への思いやりについて教えてくれている」と回答する割合が91．7%で目標の80%以上をになった。(昨年度　68．4%) ・道徳ノートやワークシートの作成、ICTの活用で児童が自分との関わりでの感想を書きやすい取り組みができた。 ・道徳授業を深める手立てとして、ローテーション授業ができた。(児童理解・教材研究の深まり・時間短縮)重点教材の向上を図る。 ②③月に1度の部会で児童の情報交換を行い，学校全体で共有することができた。職員会議でも各学年から直接話をすることで，学校全体の様子を共有することができた。 ・「問題行動への対応」「虐待事案への対応」等について資料を用いて研修し、様々なケースにおける対応を学ぶことができた。 ・いじめアンケートの実施により、いじめの実態把握を行うことができた。また、アンケート実施期間外においても、重大事案が発生した際には、早急にいじめ問題対策委員会を開設し、今後の対応策を考えることができた。全3回のアンケートを実施した中で、複数回いじめを訴える児童もいた。 ・やまびこの郷やSSW等、外部機関と連携することで、児童だけでなく保護者への働きかけも積極的に行うことができた。 ・人手が少ない中でも、別室に毎時間職員や子どもサポーターを配置し、安心して過ごせる居場所を作ることができた。しかし、不登校児童や行き渋りを訴える児童の、登校できるための手立てとして、別室が効果的に活用することは十分にはできなかった。	・学校評価アンケート(教師用)に、「先生や友だちに進んであいさつすることのよさの指導をしている。」の項目を追加する。 ・引き続き代表委員のあいさつ運動を継続する。 ・道徳授業や学級会活動などであいさつすることの良さを指導する。 ・道徳ノートの使い方やICTの活用、子どもの実態に合ったワークシートの共有をする。 ・児童理解・教材研究の深まり・時間短縮を図るために、重点教材をローテーション授業で進める。 ②③認知した児童に関しては、いじめとなる行為が止んでいたとしても、継続的に経過を観察するとともに、保護者との情報共有を密に行っていく。また、学級だけの指導にとどまらず、学年での指導もしていく。 ・不登校児童や行き渋りを繰り返す全ての児童と家庭に対して、外部機関との連携が十分にとれたわけではないので、今後も引き続き、学校だけで問題を抱えるのではなく、外部機関へ積極的に情報を共有し、多方面からアプローチしていく。 ・今後も安心して過ごせる居場所作りができるように、別室の運営を継続していく。来年度は、別室を開設する日を週の中で限定し、入り込みをする職員も極力固定化していく。そうすることで、児童との信頼関係を築きやすくなり、別室を効果的に活用していけるように	別室名前を工夫したものにしてみてはどうか。 場所や移動のルートは来年度から改善されているので良いと思われる。運営に当たっても協力できるところはしていきたい。
		「健やかな体」の育成 ①児童生徒の体力向上の促進 ②魅力ある部活動の推進 ③発達段階に応じた健全な食育の推進	①体力づくり 〇安全に配慮した授業づくり 〇自分の体を知り、心身共に健康な身体を作るとともに、基本的な生活習慣を実践できる子どもを育てる。 ③健やかな体づくりの推進 発達段階に応じた健全な食育の推進	①体育の授業の中で、運動量を確保し、運動に親しむ。 ・年間カリキュラムに沿って、多様な運動に親しみ、体力の向上を図る。 ・前年度スポーツテストの結果から、投力・持久力の弱さが見られた。授業の中で運動量を確保し、力の向上を図る。 ・新型コロナウイルスや熱中症に配慮しながら、外遊びを促す。 ・体育大会を全校で取り組む形に近付け、運動の楽しさを実感させる。 ・学校全体で異学年交流も含めて「長縄大会」を開催する。 〇体育の授業や休み時間に児童が自ら安全に配慮できる力を養う。 ・年間カリキュラムの中で(特に1，2年生)遊具に使い方に触れ、児童が安全に体力を向上させることができるよう指導する。 ・遊具だけではなく、体育で扱う道具の扱い方について授業の中で指導する。 ・安全に気を付けることも体育の主体的に学習に取り組む態度の一つであることを理解し、指導内容に入れる。・年間カリキュラムに沿って食に関する知識を増やし、食の知識の向上を図る。 〇カリキュラムに応じた保健学習、保健学習参観、発達段階に応じた保健指導、「ほけんだより」を活用し、家庭教育と連携した保健指導の実施により生活習慣の改善を図る。 ・クラスでの保健指導の材料として使用できる「保健だより」を作成し、「保健だより」を使って保健指導をして児童が健康の大切さを意識できるようにする。 ・「すくすくチェック」(睡眠・朝ごはん・テレビやゲームなどの視聴時間) ・夏休み・冬休み後に家庭教育と連携し、生活習慣の見直しと良い習慣作りへの意識化を図る。 ・むし歯・歯肉炎の治療や視力低下児童の早期受診を呼びかける。 ③給食だよりによって食に関する情報を配布し、産地や生産者への食に関する興味を持たせる。 ・放送委員による献立の紹介により、食の楽しさを実感させる。 ・年間カリキュラムの中で(特に2年生)栄養教諭による指導により、「食育」の食物を選択する能力を養い高める。	①単元ごとに学年内で教材研究を深め、児童の実態に応じた場の設定や教材の選択をする。 ・低学年段階からゲーム領域でベースボール型を取り入れたり、走り活動を積極的に取り入れたりする。 ・放送等も活用しながら、外遊びを促す。 ・内容を精選し、午前中で完結する体育大会の土台をつくる。 ・学年で教材研究を深め、児童の実態に応じた場の設定や教材の選択をする。 ・低学年段階はしっかりと指導してから外遊びの許可を出すことや、学校全体として安全に配慮した授業構成や休み時間利用になっているかを確認する。 ②睡眠、食事、身の回りの清潔等、基本的生活習慣の改善を図る。 ・学校評価アンケートの「学校は、健康の大切さについて保健の授業や保健だよりなどで指導している」「あてはまる」と回答した児童・保護者・教職員が75%以上。 ・むし歯・歯肉炎・視力低下で一度も受診していない児童の解消をめざす。 ③放送や給食だよりやひとくちコメントによって、食に関する意識を高める。 ・衛生面に気をつけて、正しい配膳方法で配膳することができる。	B	・「阪神タイガースゲストティーチャー」で外部講師を招き低学年で実施した。 ・学校内でドッジボール大会、長縄大会を開催し、体力向上を図った。 ・1，2年生で遊具の使い方などを指導することにより、遊具でのケガが減った。 ・物品の管理が甘かった。 ・カリキュラム通りに授業を出来たが季節に合わせての見直しと物品の修理と購入が必要。 ・運動場において、球技と走るカリキュラムが一緒になることで怪我の危険性があった。 ・冬場の授業が寒いという声が上がった。 ②児童、保護者ともにアンケートにおいてA(よくあてはまる)またはB(ややあてはまる)と回答する割合が児童・保護者・教職員ともに75%以上であった。(児童76．1%、保護者98．8%・教職員93%) ・すくすくチェックの保護者アンケートでは、「子どもが自分で振り返りと目標設定ができるようになった」「すくすくチェックがはじまると早寝早起きができ、生活リズムがととのった」というプラスの意見が多かった。 ③放送委員や給食委員による給食放送を実施して、全校生に献立の紹介や食の楽しさを伝えることができた。 ・給食の配膳に関しては、衛生面に気をつけながら実施することができた。 ・アレルギー対応に関しては、保護者が不信感を抱く対応があった。 ・栄養教諭による、食に関する指導をカリキュラム通りにおこなうことができた。	・物品の再購入を検討する。 ・カリキュラムの見直しが必要。 ・保健の授業で、健康の大切さについて深め、、保健教育の参観授業を行うとともに、ほけんだよりの配布時に学級指導をする。 ・年間カリキュラム通りの指導を意識したものの、カリキュラム通りでなかった部分もあったため、来年度はカリキュラムを意識して指導していきたい。 ・「食のハンドブック」を授業でもう少し活用できるようにしていきたい。 ・アレルギー対応は引き続き保護者と連携しながら、ダブルチェックを徹底していく。	体力テストはある程度のこつが必要で、経験をしていなければ正確な値が取れないと思う。特に投げる運動は少ないと思うので、運動場の道具などで工夫ができるとよい。

	教育相談・支援体制の充実 ①キャリア教育の推進 ②スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーの活用 ③教育相談の充実	①自分が集団の中で役立ったり、認められたりする喜びを味わい、夢や希望を持って学び続ける児童の育成。 ②様々な角度からの児童理解・支援の推進。	①全国学力、学習状況調査の結果分析 ・キャリア・パスポートの活用 ・学校評価 ②学習面や友人関係に悩んでいたり、登校渋りが見られたりした時には、担任が対応するだけでなく、必要に応じてスクールカウンセリングを活用する。 ・不登校傾向にある家庭や、学校の対応だけでは改善が見込めない家庭には、生活指導担当を中心にスクールソーシャルワーカーと積極的に情報を交流し、外部機関からも支援していけるようにする。	①自分の価値を見いだし、意欲的に学び合うことができる。 ・自他の命を大切にし、心豊かに生き抜くことができる。 ②部会での情報交換をもとに、関係機関との連携の必要性の有無を定期的に確認する。	B	①【成果】 ・キャリアパスポートを活用することで保護者と子どもの実態について共有することができた。 ・全国学力調査の結果を分析して今後の指導の方向性を教職員間で共有することができた。 【課題】 ・学校評価の活用 ・実際の授業にキャリアパスポートを活かすことができなかった。 ②部会で情報を共有するだけでなく、スクールカウンセリングを活用したり、スクールソーシャルワーカーと連携し、外部機関の方から家庭や児童にアプローチをしてもらったり、担任だけでなく、多くの人が関わりを持って対応することができた。また、ケース会議やミニケース会議を開くことで、学校側が取り組むべきこと、外部機関ができることを共有し、組織的に対応することができた。	・学級力アンケートなどで学級の実態を話し合う際に、キャリアパスポートを用いて自分の生活についてふりかえさせる。 ・不登校傾向にある全ての児童・家庭に対して外部機関との連携が十分にとれたわけではないので、引き続きケース会議を開き、学校側と外部機関と密に連携をとっていきたい。 ・1ヶ月に3日程度、登校渋りが見られた際には、すぐに担任、当該学年、生活指導担当など、少ない人数・短い時間で情報を共有し、今後の手立てを考えるミニケース会議を今年度以上に積極的に実施していく。	キャリアパスポートを使った振り返りをしっかりと継続していただきたい。
	特別支援教育の推進 ②特別支援教育の充実	○計画的・組織的な支援体制の整備 ○個別の指導計画の作成	・共に生き、共に学ぶ力を育て合う仲間作りの実現を図る。 ・1年児童に特別支援教室の見学を行う。 ・子どもや保護者の思い・願いを受け止めながら支援する。 ・関係諸機関と連携を取りながら、通級指導、巡回相談やコンサルテーションなどを有効的に活用し、支援の必要な児童への理解を深め、支援方法を充実させる。 ・支援が必要な児童については校内委員会で情報を共有し、職員全体へ共通理解を促していく。必要に応じてケース会議を開く。 ・校内委員会において、教室環境の整備やユニバーサルデザインを取り入れた授業づくりなどを周知していく。 ・合理的配慮をふまえた個別の指導計画を作成し、サポートファイルステップぐんぐんや校内支援ファイルを通して、継続的な支援を目指す。	・様々な子どもの特性を共通理解する研修を年に2回行う。 ・教職員の評価アンケート「校内支援委員会が効果的に機能している」と回答する割合が90%以上になる。 ・教職員の評価アンケート「個別の指導計画に基づき一人一人の教育的ニーズに応じた指導に努めている」と回答する割合が85%以上になる。	A	・様々な子どもの特性を共通理解する研修を年に2回行った。 ・スキルアップ研修を年に3回行った。専門の先生や巡回相談、コンサルテーションなどを活用し、児童の観察及び支援の助言をいただき、支援を必要とする児童の理解に努めることができた。 ◎特支、コーディネーターが保護者との面談やコンサルテーションなどのFBに積極的に入ることで、保護者や本人の困り感を知ったり、支援方法（サポートファイルなども含めて）を一緒に考えることができた。 ◎転籍までの流れについての資料を作成し、学校全体で共有することができた。 ・教職員の評価アンケートで「要配慮児童の共通理解は関わる職員間で十分だった。」という項目において、十分当てはまる、あてはまると回答した割合が100%であった。 △部会の共有に上がってくる児童が多く、具体的な支援方法を探る時間が取れなかった。 △特別支援学級の児童の中で、通常学級における学習参加が難しい児童について、どのように支援や体制を組んでいくか、課題が残った。 ・教職員の評価アンケート「個別の指導計画に基づき一人一人の教育的ニーズに応じた指導に努めている」と回答する割合が89．5%だった。 ・個別の指導計画の内容について、何のために何を残していくを研修を通して理解を図ることができたが、 今後も定期的に行うべきであると考える。	・部会の中でスキルアップ研修のテーマを一学期毎に決め、主体的に研修に参加してもらえるように努める。 ・関係諸機関と連携を取りながら、通級指導、巡回相談やコンサルテーション、外部の先生などを有効的に活用し、支援の必要な児童への理解を深め、支援方法を充実させる。 ・部会の中で、コンサルテーションや巡回相談、研修等で得た支援方法等を全体に周知できるように取り組み、教職員の引き出しを増やしていく。 ・サポートファイルステップぐんぐんの意義や内容についての研修を定期的に行っていく。	サポートファイルはしっかり引き継いでいただき、引き続き保護者が何度も同じことを担任が変わるたびに伝えなくてよいようにしていってほしい。
	教職員の資質向上 ①研修等の充実	■認めあい，高め合い，協働して取り組む教師集団を育むための校内研修の充実	■夏季研修の時期を見直し，研修内容を夏季休業中に深められるようにする。 ■本校職員を講師とした自由参加のスキルアップ研修を随時行い，資質の向上をはかる。 ■他校の研究発表会の積極的な参加を行う。	・7月中に夏季研修を実施する。 ・スキルアップ研修を2か月に1回以上実施する。 ・全職員が1度は他校の研究発表会に参加できるよう呼びかける。	B	・夏季研修の時期を見直したことで，時間のある夏季休業中に研修の内容を深めたり，広げたりすることができた。 ・働き方改革の観点から，研修の内容を吟味・精選することで，時間を有効に使えるようにする必要がある。 ・スキルアップ研修は目標以上の回数を実施することができ，ICT活用・生徒指導・特別支援などニーズに合わせた研修をもつことができた。 ・行事と重なり，他校の研究発表会に参加できた人数が少なかった。	・来年度も引き続き夏休み初めの7月に夏季研修を行う。 ・部会ごとに毎年研修を行う必要があるもの，2年に1度行うものなど内容を精選する機会をもつ。 ・引き続きニーズに応じたスキルアップ研修を開催できるようにする。 ・計画的に他校の研究発表会について案内し，参加を呼び掛ける。	
教育環境の整備・充実	学校を支える組織体制の整備 ①コミュニティ・スクールの充実 ②地域と学校の連携・協働体制の構築	①コミュニティ・スクールの充実を図る。 ②地域・保護者との連携を図る。	①学校・家庭・地域の連携・協働体制の一層の充実を図る。 ②PTAの主催行事や地域の行事等に積極的に参加する。	①学校運営協議会を年3回開催し、児童、保護者、地域の希望に応え信頼される学校運営を行う。 ②「学校は、保護者や地域の人たちの願いに応えようとしている。」の割合を90%以上にする。	A	①学校運営協議会を年3回開催することができた。 ②「学校は、保護者や地域の人たちの願いに応えようとしている。」の割合が　%で目標を達成することができた。	①学校運営協議会委員と教職員の交流の機会を増やす。働き方改革、不登校、学力について熟議していく。 ②地域との交流・連携を図り、地域の教育力を有効に活用していく。	引き続き人材育成を図っていただきたい。 働き方改革とのバランスが難しいが、協力できるところは運営協議会もしていきたいので、具体的な年間の学年行事計画を提示していただきたい。
	安全・安心な教育環境の充実 ①学校園防犯訓練・防災教育の充実 ②子どもの安全対策の推進 ③交通安全対策の推進 ④学校園施設の整備・維持保全 ⑤学校における働き方改革の推進	①1.2.3安全教育の取り組みと避難訓練の実施 4.校内の安全点検の実施 ⑤仕事の負担を軽減し、学級経営や学校運営など時間を掛けて取り組みたい事に時間を割けるようにする。	1.各種危機管理マニュアルの作成・改善 マニュアルを元に訓練を計画し、実施。 2.訓練の事前・事後指導の実施。 3.事故防止、交通安全の啓発 4.定期的な安全点検。 自然災害後の、校内の安全点検。登下校路の安全確認。 ・電話対応の時間を、定時に近づける。 ・会議の回数を減らす。 ・家庭訪問の内容・方法の見直し	マニュアルを作成している。 各学期に1回以上の訓練を実施している。 訓練後にふり返りを行い、次年度への引き継ぎを行う。 訓練のある時に、事前・事後指導を行う。 長期休み前に、交通ルールについて学級指導を行う。 3年生時に、自転車教室を行う。 毎月（年間10回）安全点検を行い、安全で安心な教育環境を整える。 警報が発令された際、職員全体で安全点検の箇所を割り振り、児童の登校時・下校時の安全を確保する。 校内アンケートにて、「有事の際の組織的な体制や対応は適切である。」の問いに対して「あてはまる」と回答する割合が70%以上になる。 ・保護者の理解を得た上での、8：00～17：00までの対応にする。 ・事前に会議の要・不要を確認し、必要な会議のみ行う。 ・目的を「居宅確認」とし、ポスティングのみとする。	B	①マニュアルの作成を毎年作成し、各学期1回以上の避難訓練を実施している。しかし、マニュアル以外にも訓練を実施しているため、マニュアルも対応させていく必要がある。 ②訓練時には、事前・事後指導を行えている。 ③長期休み前には、交通ルールの学級指導を行っている。 ④毎月20日に安全点検を行っている。校内で修繕できる部分は1ヶ月以内に修繕を行っている。 今年度は、警報があり休校となった日が1日あった。その際は、校内の安全点検を行った。 校内アンケートは90%があてはまると答えていた。 児童・保護者アンケートに関しても、自分の命を守ることに関しては90%以上が肯定的な考えを持てている。 ・電話対応の時間を定時に近づけたりや不要な会議を削減したりすることができた。 ・職長ファイルを活用することで、連絡事項を集合することなく周知することが出来ている。 ・今年度は、遅い時刻まで残る職員の数が減ったので、負担軽減の成果が出ている。	①他校のマニュアルを参考に、各避難訓練についてのマニュアルを加えていく。 避難訓練の回数は、今年度から1回増やし、必要な訓練を1年間で行えるようにする。 ②今後も、児童の防災・防犯意識をあげるため、事前・事後指導を行っていく。 ③繰り返し伝える事が必要なので、各長期休み前には話を継続する。 ④安全点検を実施したが、校内だけでは修理ができない場所も残されている。次年度中に改善されるように修理申請を行っていく。 今後も、児童に命を守る大切さを伝えていく。 ・懇談の終了時刻を定時（16時45分）として予定を組むようにする。 ・前年までに兄弟姉妹を受け持っていたり、2回以上担任を経験している児童宅に関しては、ポスティングを行わない旨を事前に保護者へ手紙等で連絡をしておく。 以上のことを実行することで、さらに負担を減らすことができる。	安全点検を学校競技委員も参加するなど、外部の視点で見ていくこともよいかと思うので、協力したい。

学校関係者評価総括

引き続き、学校と連携して情報を共有していきたい。地域や保護者が学校運営に参画できるような仕組みづくりや、参観日やオープンスクールをはじめ学校行事にも積極的に参加して子供たちの様子を知っていきたい。

次年度に向けた重点的な改善点

チームとして学校運営協議会を軸に地域・保護者・学校が連携できるような組織づくりをさらに進める。

自己評価の基準　A：目標を上回った　B：目標どおりに達成できた　C：目標をやや下回った　D：目標を大きく下回った